



童 話

小人の大助

とよ子

むかし、或處に一軒の百姓屋がありました。此家には一人も子供がありませんので家には唯二人きりの小人數で誠に淋しい暮しをして居りました。百姓のおかみさんは或時何故此處の家には子供がないかしら、せめて小さい子の一人位は授かつても宜さうなものだと思つて村の鎮守の神様に御願ひして何卒何んなに小さくても構ひませんから一人子供が生まれ様にと願ひ掛けますとそれから幾日か經つて一人の赤ん坊が生まれました。見るとおかみさんの御願した通り、それは大變な小さな赤ん坊で大きさが漸くのことで鶏の卵子位生れた時に取上げに來て呉れたお産婆さんが最少しで手から落す所でした。けれど眼も鼻も耳も手も口も足も皆ちやんと立派に着いて居て而も丸々と太つた誠に可愛らしい男の子でありました。何しろ子供の居なかつた所へ授かつたのですから二人の百姓は大喜び

で早速産着を縫ふやら布圍を造るやら大騒ぎであ
りました。先づ着物の大きさが小さな人形に着せ
る位、帽子は夏の事だから大きさがよからうと云
ふので丁度お茶臺の太きさ位、靴はと云ふと此頃
皆さんがお家で召し上つた蠶豆の袋位、誠に小さ
な可愛らしいものでした。そして當り前の子供は
生れてのち餘程経つてからでなければ歩けません
が、此子供はもう生れた其翌日からチヨコ〜と
そこらを立つて歩いて居ました。

百姓は此小さな赤ん坊に、早く大きくなるやうに
と云ふ意味で大助と云ふ名をつけて毎日其生長を
楽しんで居りました。そして百姓は毎日畑へ行く
ときも裏の山へ薪切りに行くとさも必ず此大助を
懐へ入れて行くのがさまりでありました。大助
もお父さんの懐へ入つて方々へ行くのが何より好
きで道々お父さんの襟口から首を出してそこらの
ぞいたり、又は懐から背中へ回はつてお父さんの
肩から後の方をのぞいたりするのが何より樂しみ
でありました。畑へ行つてからはお父さんの仕事
をなさる間何時もお辨當箱の傍の草の上に座つて

すみれやたんぽよつくし、つばな、やりんどうな
ど色々の草を取つて一人で色々のものをこしらへ
て遊んで居りました。

さて或時のこと、百姓はいつもの通り朝早く起さ
て裏の山へ上つて薪を切つて居り、大助は例の通
りお辨當の番人をして居りました。スルト何處か
らともなく一人の大男實際天迄届くかと思ふ様な
大男が向ふの山奥の方からノソリ〜と出て來ま
した。見るからにひげ髭々と生やした恐ろしい大
男でした。やがて百姓の仕事をして居る近所へや
つて來て何か面白ひことはいないかしらとでも云ふ
様な風で頻りにあたりを見廻はして居りましたが
フト氣がついたのは百姓のお辨當の傍に小さな動
くものがあることです。

「オヤ何だか動くものがあるぞ、オヤ〜蛙かと
思つたらそうではないぞ、イヨ〜これは珍しい、
人間の子だ、オ小人だ、一體全體世間の人間共
何うして斯う揃ひも揃つて小さいのだらう。其
中でも此人間はまた格別だ〜と云ひながら暫く
黙つて見て居りましたが

「ウン甘いことがある。此奴を家の坊やのおもちやに持つて歸つて遣らう」と云ひながらニューツと

手を伸ばして大助の襟首を摘んでスポツと自分の懐へ入れて其まゝ山奥さして行つてしまひました。百姓はそんなことは夢にも知らないで一生懸命仕事をして居ましたが晝時が来たのでお辨當を食へ襟と思つて大助の居た所へ来て見ると大事のく大助が居ません。百姓は「オヤ大助は何うしたらう。大助やー大助ー」と呼びました。が勿論返事はありませんでした。百姓は益夢中になつて「イヤ大變く、大助が何處かへ行つてしまつた。」

とキヨロく眼で仕事はそつち退けにして方々探しましたが何うしても居りません。遂々探し疲れて家へ歸つてしまひました。

こちらは山奥、彼の大男は小さな大助を懐に入れてノソリくと自分の家へ歸つて来ました。此大男の家と云ふのは山の奥の奥の奥の奥で昔し話の大

江山へつゞいて居ると云ふ所で近所には家などは一軒もなく狐や狼や熊などが始終行つたり來たりする外誰れも通る人はありませんでした。

それでも此大男は平氣なもので歩きながら行き合つた一匹の兎も手つかまいにしてだんく自分の家へ歸て来ました。やがて家の傍へ來ると門口に遊んで居た一人の男の子年は五つか六つでせう。大きさは十か十一位の大きさ、なのが此大男の歸つて來たのを見てチヨクくと驅けて來て大男の手にぶら下つて

「お父さん、お歸り、おみやげは？」と聞きますと「ウン、い、おみやげがあるよ」斯う云ふものがあるよ」と云いながら懐から出したのが例の大助です。大助は襟首を捕へられて手足をびよてくやつて居りましたので大男の子供は大悦び「ヤア、是は面白いな、お父さん、是生きて居る人形？、エ、さうでせう、面白いなあ、僕に持

たせて！」と云ひながら、大助の首ツ玉を二人の指で一才摘んで振ら下げたから堪まらない。大助は

「ア痛々々々」と云ひながら手足をもちいで頭を放して貰ふとするところが、其驢ぐのが面白いので却つて何時迄も吊さげられるので大助はもう首が抜けさうになりました。子供は頓がて家の中へ入つてお母さんの所へもつて行つて

「お母さん、是お覽！生きた人形、お父さんのお土産！」と云ひながら手の上に乗せて見せました。

夫れから子供は自分の机の上へ乗せて置いておもちや箱からまゝ、事の道具を出して夫れへ御飯だのお菓子だのと色々御馳走をして呉れました。斯うしてからと云ふものは毎日朝から晩迄大助は山男の子どもの遊び相手をして暮して居ました

が暇があるとは家のことを思ひだして「ア、ア今時分お父さんは何をして居らしやるだらう、お母さんらんぶの傍でお仕事かしら、何うかして早く家へ行つて見たいものだ」と思つて居りました。或雨の降つた日も珍らしく子供が

晝寝をしたので一人つくつくと家へ歸り度なつてメソメソと泣いて居りました。

子供は暫くして眼を覺して見ると部屋の間で小さなすすり泣きの聲がします、何かしらと見ると大助が小さな泣き聲で泣いて居ますので、驚いて飛び起きて

「オイ、生きた人形、何うしたんだへ、何故泣くの？」と尋ねました。大助は泣きながら「坊ちゃん、御願ですから何うぞ早く家へ歸して下さい。私は家へ歸り度くてたまらないのです」と

云ひました。そこで子供はお父さんと相談して大助がだんく大きくなつてあたり前の人位になつてそして此子どもと相撲をとつても負けないうになつたらは歸すことに致しました。併し小人の大助があたりまへの人間に何時なれるでせう。そして又此大きな子供と相撲とつて何うして勝てるでせう。是は逆ももう家へは歸れないかしらと大助は心の中に悲しくなりました。其晩は色々家のことや自分のことを考へて能くは寝

られませんでした。翌朝目が覺めて見ると何んだか寢臺が小さくて足が外へ出て居る様です。

「オヤ變だぞ、寢臺の外へ足の出る筈がないが、夕べ寢る時に寢臺の上でなくおもちや箱の上へ

でも寢たかしらイヤ、そんなことはない筈だ

ちやんと寢床の上へ寢たに違ひないがと思ひましたから起き上つて見ると何の布團も矢張平常の

布團で別段變つた所はありません。それにしても何うして足が出たのかしらと念の爲めにも一度寢

て見ると是は不思議、いつも布團よりも勢の短かつた自分のからだは一晚の中に凡を五寸ばかり

大きくなつて最早人形のふとんで間に合はなくなつて居りました。是を見大助は一人で大悦び寢

床の上に飛び起きて躍り上つて悦んで居りました

あまり大助が悦んで躍つて居りましたので部屋に向ふの隈の大きな寢臺に寢居た子供は目を覺しました。見ると昨日迄五寸ばかりしかなかつた大

助の身の丈が急に一晚の中に凡を倍位の大さになつて居たので是も又頗る驚いた様子でした。是からと云ふものは大助の大きくなること、云つたら

實に驚く程の早さで一年か二年ばかりの間に遂々此家の子供の勢位ある様になりました。子供は大

助が大きくなつて丁度自分と同じ位になつたので又一と入の悦び毎日庭に出ては二人で相撲をと

つて遊んで居りました。併し何と云つても元が小

さかつた大助のことですから力ばとて子供には叶ひませんでした。大助は是ではならぬと一生懸命に精出して相撲の稽古をして居る中に遂々其子

供を投げ付ける様になつて漸つとのことで家へ歸して貰ふことになりました。此時の大助の様子は

身の丈は人並よりは大きくなり力は十人前位ありましたから大抵の重いものは一人がかつぐ程でし

た。

大助は久し振り家で歸るので嬉しうて堪らず早くお父さんやお母さんにお目に掛りたいと思つてスタ／＼と途々急いで來ると直に村はづれの耕

地に出ました。ヤレ嬉しや自分の家の近所へ來た誰れか知つて居る人は居ないかしらと、其處邊を見廻はすと向ふの方に一人のおぢいさんが頻りに

田圃の中で馬をつかつてうなつて居りました。誰

れかしら何だか見た事のあるおぢいさんだと思ひながら段々近づいて見ると是は驚いたおぢいさんと思つたのは自分の戀しい／＼と思つたお父さんです。成程考へれば自分が山男にさらはれてから一年や二年ではないのでお父さんは年老になつてしまつたのです。大助は急いでお父さんの傍へ行つて

「ア、嬉しい、ヤツトのことでお父さんにお目に掛つた。お父さん、其後は御丈夫で御座いましたか。私は大助ですよ」と云ひましたがお父さんはげんな顔をして眼をしよば／＼しながら

「お前さんは何處の人だかね、私の處の大助ちう小倅はあ五年ばかり前に山でさらはれやしたそしてお前様見たいに大きくなかつたよ」と云つて居て大助の云ふことをほんとしませんでした。大助は「イエお父さん私が大助ですよ私は山男にさらはれて連れて行かれてからこんなになつたんです」と、それから色々とその後のことを話し

て聞かしましたので、やつとのことお父さんも得心しました。

是から大助はお父さんの手傳をして田をうなつて見ましたが何せよ十人前も力がありますから馬などなくつてもどん／＼土を掘り返して見て居る中に田をうなつてしまひました。大助は

「お父さん、モウ田圃は私一人で澤山ですから早く家へ歸つてお休みなさい、そして晩の御飯でも澤山たいておいて下さい」と云ひますのでお父さんは

「オそう、お母さんにも早く話してやらう御馳走も造へて置かう」と云ひながら家へ行つてしまひました。大助はそれから畑もうなつてしまひ、それから山へ行つて大きな木を手折りにして薪を造へて山の様に背中に負つて家へ歸つて來ました。門口へ來るとお母さんは大悦びで

「オ、これが大助かへ成る程見違へる程大きくなつたね成る程力も大層あるね、サア、早く足を洗つてお上りお湯もわかつてあるから入るなら過ぐお入り」と家中大悦び大助は是からお父さ

んやお母さんの傍で仕合に暮して居りましたとさ
めでたし〜〜〜

机と硯と墨

と　よ　子

太郎さんは今年の四月尋常一年に上つた誠に〜
おとなしい勉強ずきのよいお子なのです。

朝もおかあさんにもちつとも御世話をやかせず早く起きてお行儀よくごはんをすまし御本の包を持つてにこ〜と學校へ行かれますし又歸つてからもおやつをたべてから一時間許りを本をさらつたり御習字をしたりなさいますそれがまだお父様もお母様も少さいのにあまり勉強するのはいけなからと云つてお机もなんにも太郎さんには買つてあげずに居ましたか毎日〜太郎さんが書生部屋に行つては大きい高い机で勉強なさると云ふ事を聞いてそれでは反つていけないからと御両親が御相談なさつて太郎さんの爲に一つ丁度よい大

さの机や硯をかつて上げる事にしました。
そんなうれしい事があらふとは夢にも知らず太郎は元氣よく唱歌を唱いながら歸つて来て

太郎おとうさんおかあさん「今」

と御あいさつしました

おとうさんにこ〜しながら

父「太郎さん今からすぐおとうさんと一所にい

つてあなたにい、机や硯を買つてあげませう」

とおつしやいしましたので太郎はうれしくて〜た
まらず早く行ましょ〜とせき立て、本郷の通
で夢中で來ましたをしてよい机と硯と墨と筆とを
買つていたいき喜び勇んでおうちへ歸り早速お
か様の御部屋へ置きました今迄とちがひ高さも丁
度よいしするので太郎はうれしくてたまらずぐ
墨をこくすつていろ〜の字や書を書きました
これからは毎日〜猶更一生懸命でおさらいして
居ますので墨はどん〜へり机もつひ筆を落して
墨がついたり石盤がぶつかつてぎづが出來たりし
はじめました。